

滋賀の森から舞根の海へ／舞根集会所

From Shiga's Forests to the Mone Sea / Mone District Community Center

松岡拓公雄

Takeo Matsuoka

滋賀県立大学環境科学部教授、アーキテクトシップ代表建築家、NPOエコ村ネットワーク理事／1952年生まれ。

東京藝術大学大学院美術研究科修了。環境建築デザイン。主な作品に「鳥取フラワーパーク」「三戸町役場」「長田電機工場」ほか。

「札幌モエレ沼公園の実現に関わる17年間の活動」にて2008年日本建築学会賞(業績)、土木学会デザイン賞受賞ほか

本稿は宮城県気仙沼市唐桑町舞根地区にて、滋賀県立大学松岡拓公雄研究室が提案した復活の灯火をつけた海の集会場の建設過程の報告である。

舞根漁港の被災状況と集会所建設経過

滋賀のNPO「エコ村ネットワーク」では、滋賀の森の再生や持続可能なエコ村づくりの視座で活動が続けているが、私もその一員として震災直後から被災地に対する住宅地の支援活動の準備を始めた。3月から5月に福島、宮城、岩手を数度訪ね、自治体とも接触し、協力の場を探す行程で、気仙沼市舞根地区を拠点に活動する「NPO森は海の恋人」代表の畠山重篤氏と出会う。彼らは森によって海が活かされる関係を重視し、牡蠣の養殖のため植林の活動などを積極的に続けている。舞根地区はそのNPOの拠点であり、舞根湾での牡蠣養殖が有名である。そこにはお互いを「親類」と呼ぶ濃密な絆が現在まで息づいている集落がある。われわれは琵琶湖のために森を育てると同じ思想をもつ因縁を感じ、ここに焦点を当てて調査活動に入った。

舞根漁港も壊滅的打撃を受け、舞根地区は震災で地盤が50～100cmも沈下し、大津波によって52軒あった集落は44軒が流され4名の尊い命が失われた。その家の方々は今も離れた仮設住宅での生活を余儀なくされている。がれきと化した舞根地区も他の被災地と同様、高台にある住宅以外はすべて跡形もなく消え、基礎を残

すのみである。満潮になると道も沈み、集落は海の一部と化す。6月と7月、舞根との交流が始まり、高台の住宅建設などの調査も同時に重ねていく。この地区は、集団移転促進事業にいち早く手をあげたことでも知られるが、戻りたいという気持ちの方も多く、仲間どうし復興を話し合う場が求められていたが、肝心の集会所も流されていた。8月には、まずはその集会所を再建し集落の復興拠点にしたいと、具体的な要望を聞くに至り、敷地の確定まで進む。これを契機としてNPOエコ村ネットワークは総会にて、舞根の支援活動実施を決定、ボランティアの「舞根支援グループ」の結成を呼びかけるとともに、松岡研究室開発の間伐材建築構造キット「ココノマ」を応用した建築を提案することになる。

そして、製作に携わる甲賀市信楽森林組合や、設備ユニットを開発した京援隊をはじめとした県内外の43の企業・団体が続々と参画・支援を申し出て、体制が着々と整えられていった。同時に滋賀では確認申請の準備、現地では用地確定の手続などが進められた。9月、支援活動、物資や人材など現地の要望に根ざした格好での具現化に向けて、近江八幡や舞根で何度も話し合いがもたれた。現場は滋賀県から遠方にあり、工事の方法や人手、物資の調達に関しては困難が山積みであった。結局、被災地である現地では、建材他の調達は容易ではないことから、すべてを滋賀県から運ぶこととなる。飯田航氏、秋村洋氏らが建設ミッションの中心となり、賛同した熟練工や森林組合員、滋賀県大の学生らが集結し「舞



図1 | 4月29日がれきのままの舞根湾
[撮影：飯田航／プラネットリビング]



図2 | 完成した舞根集会所 [撮影：松岡研究室]



図3 | 16間インテリア
[撮影：飯田航]

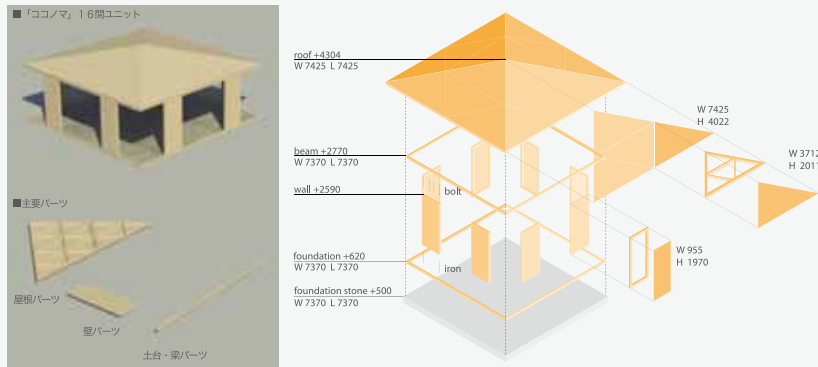


図4 | 16間間伐材建築構造ユニット【作成：松岡研究室】

根支援グループ・施工チーム」が結成された。10月、屋根や壁の基本ユニットを滋賀県産材の集中する信楽森林組合の工場で作製。大型トラック4台、工事車両5台からなる車両部隊が編成され、資材と人を満載し、1,000キロの出動となった。そして、メンバーは入れ替わりながら実働工事日数は5日間で仕上げた。

「被災地のために何か役に立ちたい」という尊い気持ちのボランティア活動も、一歩間違えば現地では迷惑になりかねないという厳しい現実があるなかで、私たちは受け入れ先にも恵まれたとも言える。完成時には地元や被災者の方々が大勢集まり、「餅まき」も行われ、滋賀の祝詞も奏上され、多くの感謝の言葉をちょうだいした(図1-3)。

人と森と海をつなぐココノマ

「ココノマ」プロジェクトは2008年から、滋賀県立大学松岡拓公雄研究室で始めた。このプロジェクトは森を維持するため滋賀県産材の活用を図り、循環型資源である木材、そのなかでも建材として利用が難しいとされていた小径間伐材の有効利用を可能にした木造建築ユニットを開発する計画である。梅沢構造研究所と普及促進を図る(株)地球の芽、甲賀市信楽森林組合とともに滋賀県から地域材活用事業に選定され開発してきた。木造トンネル型やコンテナ型がすでに他社により開発されていたが、「ココノマ」は汎用性のある普遍的でベーシックな形を模



図6 | 舞根復興の灯火【撮影：飯田航】



図7 | 舞根湾に向かって建つ集会所【撮影：飯田航】



図5 | 建設2日目【撮影：松岡研究室】

索した。その結果生まれた「ココノマ」は9cm角の小径材を構造部材として、最小限の部材量で十分な強度を獲得し、無柱空間を可能にした3間角7.2m四方の建築ユニットである。土台・梁パーツ、壁パーツと屋根パーツという3種類のパーツから成り立っている。現在はこれをいくつか実践し、連結タイプや2階建てタイプへと展開している。

内部空間やコーナーに柱が不要のため、空間に一体感と開放感をもたらすとともに、工場内で製材することで、現場の施工期間を短縮でき省コストにつながる。また特に熟練者に限らず建築プロセスに参加できる。そこで震災直後から集落再生にうってつけの構造体と考え、この「ココノマ」をまずは仮設住宅に使えないものか思案し、滋賀県にも問いかけてきたが、当初は人的、物資支援を優先的に進める状況下で、また合板の供給もままならず、動けない事態となり、現地視察を重ねるしかなかった。

舞根地区にて、実現の可能性を得たが、この機に地元の要望に応じて「ココノマ」を一回り大きくした4間角の16坪ある「16間」を新たに計画し、本設とすることができた(図4・5)。

今後のモデル化

復興支援には個々の地域、集落の状況に応じたきめの細かい対応が必要であり、大蛇のアイデアだけでは、ままならない場所が多くある。現実はその実態ではなかろうか。個々の人々への独自の対応が、積み上げられて全体へと広がるような流れも一方では必要かと何度か被災地に通って感じている。小さな16間ユニット計画ではあるが、多くの人々の協力で震災後9か月目にして実現するに至った。今後このようなモデルは東北でも有効であると思い、NPO「森は海の恋人」を中心に、地元の森を育てると同時に、その際の間伐材を利用し地元の人々でこのようなベーシックな住宅建設が展開されていくことを期待し、またわれわれも協力をし続けていきたいと考えている(図6・7)。